

残された母の手紙

ひまわりへ、

こんにちは、ひまわり。21歳の誕生日に書いた手紙から、久しぶりに手紙を書くよ。あなたが旅立ってからもう3年が経ったけど、そこでは元気に過ごしているかな。気持ちを落ち着けるのに時間がかかって、手紙がこんなに遅くなってごめんね。

最後に「痛い」と言ったあなたの声が、今でも耳に残っているよ。小さい頃からずっと病気で苦しんできたあなたを見て、とても悲しかった。代わりに痛みを感じてあげたかった。でも、最後まで痛みを苦しんでいたら亡くなったことに心が痛むよ。だから、天国では痛みもなく、ゆっくり休んでいてほしいと願っているんだ。

ひまわり、世界には自然の摂理があるよね。その摂理によると時間には順番があるけど、親が子供に色々なことを教えてから先に亡くなり、子供はその教えを覚えながら一人で生きていくものだよね。でも、あなたが私より先に亡くなったのは、その順番に逆らうことだったから、残された私はとても辛かったよ。

ひまわりが亡くなった最初の一年は真っ暗だった。毎朝起きてあなたの状態をチェックして、ご飯を作り、洗濯物を畳む日常が突然なくなって、その変化に慣れるのが本当に難しかった。次の日の太陽は変わらないで昇るのに、私の毎日の全てが消えてしまって、何もやる気が出なかった。特に耐えられなかったのは、あなたの香りが薄れていくことだった。まだ残っているあなたの香りがなくなってしまうか心配で部屋を掃除することができなかった。

でも、一度心を決めて部屋を整理したら、次は少し楽になったよ。あなたが壁に張った友達との写真はアルバムに入れ、大事にしていた日記やぬいぐるみは箱にまとめた。その箱を時々開けて、あなたの写真や思い出を見て、寂しさや後悔で泣いたこともあつ

た。「もっと旅行に連れて行ってあげればよかったな」と思いながら。でも、今は泣くより、あなたとの楽しい思い出を思い出して笑えるようになったよ。

ひまわり、天国では私を気にしなく、やりたいことをたくさんしてくれね。私はあなたの分まで毎日を大切に生きていくよ。そして、私にもその時が来たら、笑顔で会おう。大好きな娘、愛しているよ。

お母さん

(892字)